

《第9回までのあらすじ》

主人公の小宝は、1937年の日中戦争開始時は南京に住む小学4年生。大きな商家に生まれた。日本軍の爆撃を避け、小宝一家も長江沿いの蕪湖といつ街に100人で疎開したが、日本軍の作戦変更により、街は焼かれた。

早々と撤退する国民党の軍隊、その敗残兵の姿を見て、蒋介石は一体どうしてこのかど、幼いながらも心を痛めた。

一方、日本軍に占領された南京の街は焼かれ、無残な姿で、長江には数えきれないほどの中国人の死体が流され、通りには多くの死体が重なつて凍りついていた。中国側の発表ではおよそ30万人。

歐米人による「難民地区」も安全でなく、日本兵が若い女子を奪い去り、辱めを受けた彼女らはみな長江に身を投げた。南京に戻った小宝一家。やがて、中央大学の学生や姉の秀華の通う高校を中心にして、1941年の夏、抗日地下組織「結救団」が結成された。秀華は延安、重慶の放送を聞き、ガラ版の「ニュースを作った。小宝も配布を手伝った。

1942年夏、ソ連の「スターリングラード攻防戦は彼らに希望を与えた。秀華の友人の中には、地下の共産党員もいた。

*この連載は、ホームページ「時事評論士シカイ」欄で、ご覧いただけます。

秀華は、自分は参加しておらず、勝手に載せられたのだから、怖がることはないと思い、父に向かいつつ言つ

あの日、汪精衛の『中央日報』に南京地下三青団全員の名簿が載った。1週間以内に自首すること、しなければ逮捕し、処罰されるとあった。秀華の名も載っていた。

三青団は、蒋介石・国民党を信奉する正統派を任じる青年組織で、厳密な規律や具体的活動はなく、議論ある程度だった。近くに住む秀華の下級生、楊宝華の従兄が、国民党から派遣され結成し、活動費を増やすため名簿をでつち挙げた。汪精衛の特務に田をつかられ、追及されて組織を売った。

た。しかし用心した《団結救国社》は名前を変え、出版物も停止した。

1942年秋、秀華は南京中央大学外国语学部に入学していた。

翌年1月のある朝、秀華は日本人憲兵と汪傀儡特務に連行された。同じ部屋には金女大付属の眞面目な下級生たちもいた。

秀華は日本憲兵隊の監獄に入れられた。叔父からの賄賂のおかげで、月に1回着替えと食べ物を渡せたが、本人には会えず。数か月後、父は金の延べ棒を数本費やして、ようやく彼女を「買い」戻した。

その夜父は木の棒を持ち、彼女を叩いた。『このつぐでなし！ 勉強せず抗日活動なんかやつて。あの蒋介石範青年団の責任者だと知った。』

秀華は、楊寶華が、今は汪精衛の

『日本人が大東亜共栄圏をうちたてるのは、我々中国人のためなのだぞ、わかつてゐるのか？』と特務は言った。

他方、林家はあちこち問合せ、秀華を探していた。国民党の特務から、傀儡軍に変わり、南京の「感化院」

院長として、共産党と抗日分子対策に専念する叔父がいた。父はこの義弟に頼み、娘の行方を問い合わせてもらつた。

秀華は日本憲兵隊の監獄に入れられた。叔父からの賄賂のおかげで、月に1回着替えと食べ物を渡せたが、本人には会えず。数か月後、父は金の延べ棒を数本費やして、ようやく彼女を「買い」戻した。

その夜父は木の棒を持ち、彼女を叩いた。『このつぐでなし！ 勉強せず抗日活動なんかやつて。あの蒋介石範青年団の責任者だと知った。』

秀華は、楊寶華が、今は汪精衛の

『日本人が大東亜共栄圏をうちたてるのは、我々中国人のためなのだぞ、わかつてゐるのか？』と特務は言った。

も、『(一)の棒をよく覚えておきなさい。』と続けた。

小宝の心の中の父親像は壊れた。尊敬し好きだった父、姉さんの愛国的な行動は我が家の榮誉であるのに、逆に犯罪になってしまった。父は中国人らしくないと penséた。

中央大学も三三團に参加したといつ理由で、秀華を除籍した。

11 一いつの鬪い一一輪車夫と学生
姉の秀華の友達の江少英は成績優秀で、中央大学への合格は向う問題なかつたが、彼女は組織の決定に従い、三輪車を製造する会社に入つた。

社長は車夫募集の際、三七の歩合を約束したが、年末には一八、しかも車の修理代を負担させよつとした。車夫たちは半年働いても大した収入にならず、結局社長に借金し、病氣でも医者にかかれなかつた。彼

そこに新しいものが登場した。三輪車である。綺麗に飾られた車、黄色に赤の縁どりの車夫の制服の胸には《三輪》の2文字。ラッパやチ

リンチリンの音は人々の注目を集めた。金持ちの多くはこれに乗るのが好きで、立派になつた氣分だった。

当時、南京の交通業は立ち遅れ、バスは1路線のみ、他は馬車、人力車が主な交通手段となつていた。

らはストをすれば弾圧されるので
どうすればいいかわからず、高校出
の江少英に相談した。

代表3人でまず社長に会いに行
つた。社長はマホガニーの椅子に足
を組み葉巻をくわえ、田も合わせば
に『今、人力車夫は山ほどいる。失
業者も多い。お前たちがいやすりじ
うか出て行つてくれ。』と叫つた。

日本憲兵隊は、誰が背後でそれのか
したか調べたがわからず、彼らの言
う「王道樂士」に面倒をもたらす社
長をなんとかするように市長に命
じた。新聞も社長の約束違反を書き
立てた。社長はやむを得ず車夫たち
と話し合ひ、三七で修理費も自分が
負担あると叫つた。

2週間続いたストは車夫たちの
勝利に終わった。この鬭争を通じて、
三輪車夫たちは、江少英を信頼し、
への配慮を指摘し、特に同郷者が彼
らの代わりに車夫として来ないよ
う、社長の本当の姿を伝え、支持を
訴えて彼らと衝突しないことを強
調した。

ストのスローガンは『まことに成
ること』。我々は三七の分配を求め
る。』だった。警察が来て、ピケ隊

長を捕え、有無を訊かせざつ殴つた。

日本憲兵隊は、誰が背後でそれのか
したか調べたがわからず、彼らの言
う「王道樂士」に面倒をもたらす社
長をなんとかするように市長に命
じた。新聞も社長の約束違反を書き
立てた。社長はやむを得ず車夫たち
と話し合ひ、三七で修理費も自分が
負担あると叫つた。

所屬させた。

食費横領に対する学生たちの鬭いは、小さな勝利ではあったが、学生の要求にもとづく公然の鬭いとして、暗闇の中の一筋の光に思われた。

この「学生互助会」は、中央大学で市が承認した合法組織であること、政治に関係ない生活面での互助組織として、学生の参加を呼びかけ、活動費は市が負担した。

当時、南京の繁華街夫子廟は、日本人と漢奸が結託したアヘン吸引所や遊郭、ダンスホールなどが設けられ、映画館も日本映画のみの上映など、低級なエロ文化に麻痺せり

王希虎（上海から移ってきた）らも参加し、世間知らずのお坊ちゃんたちの理事会の中で、徐々に主導権を握つていく。

王希虎はその中の学術係を利用して月1回『学生』を発行した。文芸作品もあれば、秀華（小宝の姉）

に翻訳させたロシアの小説や詩、魯迅の名言や警句を引用した《五・四》記念の文、また、国際情勢の客観的な紹介など多様であった。

南京市長周学熙は、日本人が創つた《東亜連盟總会》分会の会長であった。彼は自分の勢力を増大させようとして、部下を通して、中央大学の学生を「学生互助会」に組織し、学生に秘密で名義上は《東亜連盟》に

この雑誌が、日本の傀儡統治下の、文化的に荒廃した南京で出版され

たことは、多くの学生に歓迎され、ひとすじの清流となつた。

定期的な音乐会も催され、ベートーヴェンやショパンなどの古典音楽作品を紹介し、南京の退廃文化に対抗する美しい花を咲かせた。多くの学生が魅了され、小宝や希鷹のクラシック好きも、これから始まった。

また小型図書館を開き文芸書を学生たちに広めた。『コーリキーの『母』、巴金の『家』、H・ドガード・スノーの『中国の赤い星』など。多くの青年が、これらの本を通して、初めて十月革命やソ連の祖国防衛戦争、紅軍と中国共産党を知った。

また合唱団や合唱サークルも組織した。「この寒い冬をしえ、春がもうすぐ来る、枯れ木に失望するな。」と歌いつつ、涙を流さずにはいられなかつた。夏期や冬休みの補習クラス、女子学生や女子青年向けの『女青年』の発行、女工と主婦を対象にした婦女文化夜学校も開設された。

こうして『団結救国社』は秘密の活動から抜け出し、合法的な組織を利用した新しい道へと歩み始めた。

13 アヘン撲滅運動

南京の汪精衛政権は、日本の支配者に、内心多くの不満を抱いていた。

日本のタバコ商人が販売する大量のアヘンからの多額の税金は、全て日本人が持ち去り、少しのおじぼれにもあずからなかつた。当時の南京の人口はわずか40万人、一方アヘン中毒者は5万人にも達した。

汪精衛はそれを手にしようと、日本側にアヘン専売権を要求したが、

あつさつと拒絕された。それで、宣

伝部長林柏生を通じて『学生互助

会』に働きかけ、これを「アヘン・
賭け事・ダンスの三害根絶運動」と
した。

夫子廟は孔子廟や科挙の試験場

もあつたが、歴代王朝の首都の歓楽
街で、日本占領後は商店や酒場の他、
アヘン館、妓楼、賭場、ダンス場が
作られ、中国人の一部もそれらに染
まつっていた。

学生たちは議論の末、200人、
3000人と、2回行動を起こした。
アヘン館になだれこみメチャメチ
ヤに壊した。賭場やダンス場も。没
収したアヘンや道具は人力車で運
び、車夫たちも進んで隊列に加わつ
た。群衆はますます増え、南京占領
以来初めての大デモンストレー
ションとなつた。日本鬼子の支配に対

する巧妙な闘いでもあつた。

人民大会堂の入り口にアヘンと

その道具、賭け事の道具を積み上げ、
燃やした。火は1時間燃え続けた。

日本憲兵隊は銃を持ち、物凄い形相
で学生たちを睨み付けていた。

大会堂で、『首都青年学生アヘン
追放大会』を開き、リーダーが演説
した。『アヘン戦争に打ち負かされ、
我が中国は没落し、ついには半植民
地になつてしまつた。林則徐は英國
帝国主義に反対し、アヘンを禁止し
た民族の英雄である。我々は林則徐
にならわなければならぬ。・・』

話したのは歴史で、英帝国主義で
あつたが、本当は現在を指し、日本
帝国主義を指しているとわかつた。

林柏生にも参加を要請し、2時間
後にやつてきた彼は、中身のない、
おざなりの挨拶をした。だがこれで、

この集会は合法化した。

冬休みには南京の《白面大王》と呼ばれるアヘン王、曹玉成宅を200人で囲み、ベッドに横たわる本人を見つけた。40歳過ぎ、アヘン狂の顔つきで精気がない。布団をめぐるとい、奥の暗室への通路があり、大きな鉄の箱の中に銀紙に包まれた

ヘロインが34^{グラム}。彼を新街口の孫

中山先生の像の前にひざまずかせ、ヘロインを焼いた。民衆は『銃殺せよー』と口々に叫ぶ。汪傀儡政府に報告し、銃殺を要求した。

麻薬王曹玉成は1944年2月

に銃殺された。

14 先輩との別れ

一方、汪傀儡政府の林宣伝部長は、

自分の指導したこの運動が勝利を収めたことで、リーダーたちを配下に入れようと、彼らの組織力をほめ

《模範青年団》に誘ったが、『模範

の成功は、様々な影響を与えた。

南京の青年学生アヘン撲滅運動

小宝も従兄の希鷹と共に参加し、感激して、一部始終を姉の秀華に報告した。秀華は具体的な行動には参加できなかつたが、勝利の喜びを分かち合つた。小宝は特に、影のリーダーと叫ぶの任建と袁倫を尊敬していたので、秀華は誇りじく思つた。

彼女は袁倫を愛していた。任建は中央大学で表面には出なかつたが、高校生との連絡に当たり、小宝たちの読書会でもよく話した。彼の『金巴』や『家』やソ連の小説などを通して恋愛や封建制、更には社会主義、第一次大戦など、多くを学び成長した。

青年団は日本人の「大東亜共榮圏」を支持しているので、多くの青年は参加したがらないのです。』と言わ

れ、『いつのまにコントロールされないと感じ、弓曳下がった。

しかし、日本憲兵隊はこの事態に注目していた。彼らも汪政府がアヘン売買を手にしたがっていることはわかつていたが、リーダーたちは

金持ちの子弟には見えず、よく勉強する成績上位者で、発言や演説からもその能力がうかがえた。また『模範青年団』のボスのような腐敗堕落、酒色に溺れている風でもない。

特高の石井軍曹は、独特的の勘で、リーダーたちから左翼の匂いを嗅ぎ取り、中央大学に問い合わせ、日本語の流暢な学生、任建を探し当た。戸籍調査の名で任建の家を捜索し、本をひつべつ返したが全て古い

教科書ばかり。かつて2階にあった謄写版印刷機は、秀華の問題が起つてから処分していた。

数日後、石井は中国服姿で任建を訪ね、上手な日本語をほめ、友人として中国語を教えて欲しいと言った。任建は仕方なく彼の書いた「友人」となつた。彼は度々やつて来た。

ある夜、学校からの帰り道、馬上の石井に腕を掴まれ、近くの憲兵隊に連れていかれた。「おしゃべり」と言いつつ、石井は赤い丸を書き、「拡大組織」や「回郷令」について質問した。任建は『私は知りません。』と応えるのみで、石井もひつじようともなかつた。

『僕は故郷に帰る。君たちは成長し、僕と袁倫も安心している。いつか機会があれば再び会えるだらう。袁倫

に代わって、お姉さんにサコナラフを
『叫びてほしく』と言った。彼女は根
拠地に向かい、新四軍に参加した。

(へり)